

修士論文

「二次元」の性的表現を愛好する人々による強制的性愛批判の可能性

—アセクシュアルに関する研究を踏まえて—

2018年度入学

九州大学 大学院 人間環境学府
人間共生システム専攻 共生社会学コース

2020年1月 提出

要旨

本稿では、アイデンティティが多様化・独自化した状況のもとで、これまでセクシュアリティの観点から理解されることのなかった領域にも、セクシュアリティに関する既存の社会的規範を「攪乱」しうる側面が見いだせるのではないかと、という仮説をもとに、「二次元の性的表現を愛好しており、かつ現実の他者へと性的に惹かれない」人々へ聞き取り調査を行う。

このような対象は、アセクシュアルに関する議論と部分的に親和性があると予想される。しかし現在の日本ではアセクシュアルに関する研究はまだ少ないため、第1章で英語圏のアセクシュアル研究を確認し、とりわけ強制的性愛（compulsory sexuality）概念についての議論を整理する。強制的性愛概念を導入することで、セクシュアリティに関する理論的枠組みの改訂を試みる。具体的には、性をめぐる近代的な力学を「権力関係を含んだ性別二元制」と「強制的性愛」を両輪として構成されているものとして捉え、ヘテロノーマティヴィティをこの力学の内部で析出される現象と位置づける。また、セクシュアリティという概念装置が、女性の経験だけでなく、性交渉へと結びつかないセクシュアリティをも「抹消」してきたことを指摘し、後者の「抹消」を「性欲の性交欲化」と名付ける。これによって、セクシュアリティと親密性との間の癒着をより適切に理論化できると考えられる。

ここで提起した「抹消」概念は、ジュディス・バトラーの著作をもとに精緻化することができる。それゆえ第2章では、アセクシュアルの周縁化を理論的に捉えるために、ジュディス・バトラーの理論を検討する。バトラーのメランコリーのジェンダーの理論は、いくつかの点でアセクシュアル研究の知見と合致する。しかしバトラーの理論はアセクシュアルの存在を念頭に置いたものではない。それゆえ本稿では、アセクシュアル研究の知見にもとづきつつ、フロイトの読解を通して、バトラーの理論を批判的に再考する。まずバトラーが参照しているフロイトの著作を再読し、「一次的ナルシズム」によってアセクシュアルの存在が否認されていることを指摘する。この一次的ナルシズムにも他者性が刻み込まれており、その点ではメランコリーによる自我形成と類似している。しかしバトラーは、ナルシズムとメランコリーの差異を評価し損ねている。メランコリーと異なり、一次的ナルシズムには自己処罰が含まれず、それゆえ政治的表明に結実しにくい。強制的性愛の文化において、アセクシュアルはこのような地位に置かれるのである。以上

の点を踏まえて、本稿ではメランコリーによる同性愛の禁止を「排除」、一次的ナルシズムによるアセクシュアルの否認を「抹消」と呼んで、両者を区別する。このように排除と抹消を区別することによって、セクシュアル・マイノリティの周縁化が異なる仕方で生じていることを説明できると考えられる。以上の主張を通じて、アセクシュアルによる抵抗の可能性を理論化できるようにバトラーの枠組みを拡張する。

これを踏まえて、第3章では、二次元の性的表現を愛好しつつ、マンガ表現規制への反対運動に何らかの仕方でコミットしている人で、かつ現実の他者へ性的に惹かれないという人を対象に聞き取り調査を行い、かれらのアイデンティティや経験について考察する。このような人々については、これまで〈オタク〉として研究されることはあったが、先行研究では生身の人間との性愛を相対化する観点が希薄であった。言い換えれば、生身の人間との性愛を自明とする枠組みのもとで、かれらをセクシュアリティの観点から捉えるという可能性があらかじめ「抹消」されていたのである。このような「抹消」された対象を積極的にセクシュアリティの観点から捉えなおす方法として、本稿では「クリア・パースペクティブ・アクティブ・インタビュー」を用いて、かれらのライフストーリーやアイデンティティについて聞き取り調査を実施した。

かれらの語る内容は多様であるが、その多様さはアセクシュアルの多様さと類似するものであった。さらにかれらは共通して、自身が性的表現をどのように受容しているかについて、説明することや伝えることの難しさを語っていた。この説明しづらさによる悩みは、職場という権力関係の強い場だけでなく、友人に対して、あるいは性的表現に関するウェブ上での言説などに対しても生じる。このような説明しづらさの社会的背景として、「セクシュアリティ概念のジェンダー非中立性」と「性欲の性交欲化」を挙げることができる。そしてかれらの実践には、このような社会的背景を相対化する要素を読み取れる。以上のことから、マンガ表現規制をセクシュアリティの問題として捉える視座が必要であり、性的表現に関する倫理的問題を議論するうえで、性的表現の機能を本質主義的に想定すべきではない、と言える。

目次

序文.....	1
1 アセクシュアル研究における強制的性愛概念の理論的意義	4
1.1 アセクシュアルとは何か.....	4
1.2 アセクシュアル研究における強制的性愛概念	5
1.2.1 強制的性愛概念が提起される背景	6
1.2.2 強制的性愛批判のインターセクショナルな展開	7
1.3 強制的性愛批判の理論的射程.....	8
1.3.1 性別二元制と強制的性愛.....	9
1.3.2 「セクシュアリティ」概念に内在する偏向および「排除」の複数性....	10
1.4 小括.....	12
2 メランコリーのジェンダーと強制的性愛.....	13
2.1 アセクシュアルの「抹消」に関する理論的考察に向けて.....	13
2.2 アセクシュアルによる強制的性愛への抵抗とジェンダー二元論の相対化	14
2.3 フロイト理論におけるアセクシュアルの行方	16
2.4 超自我の形成に先行する一次的ナルシズム？	18
2.5 反復される「排除」と「抹消」	24
2.6 小括.....	27
3 「現実性愛」の相対化と二次元へのセクシュアリティ	29
3.1 強制的性愛概念の日本社会への適用可能性.....	29
3.2 アセクシュアルと性的表現との複雑な関係.....	30
3.2.1 表現規制にかぎらない政治性へ.....	31
3.2.2 クィア・パースペクティヴ・アクティヴ・インタビュー	32
3.3 分析.....	34
3.3.1 ライフストーリー——フィクションとの関わりを中心に.....	35
3.3.2 「性的」であることに関する意味づけ	45
3.3.3 「現実性愛」に準拠しない解釈規則.....	47
3.3.4 感覚の説明しづらさや伝わりづらさ	49

3.3.5 「性的な解放」言説に含まれる強制的性愛への違和感	53
3.4 考察.....	54
3.4.1 セクシュアリティ概念のジェンダー非中立性と性欲の性交欲化.....	54
3.4.2 「性的」ということの社会的構築	55
3.4.3 多重見当識という「『指向』の複数化」	56
3.5 小括——セクシュアリティの複数化を積極的に読み取る	57
総括と展望.....	59
[注].....	60
[文献]	67